



里海づくりにおける課題

「今後の里海づくりのあり方に関する提言」を参考
<https://www.env.go.jp/content/000305565.pdf>

- 科学的な知見や生態学の基礎を十分に踏まえないことによるアマモ等の枯死
- 地域の特性（歩んできた歴史・文化・森里川海の視点）が考慮されていない
- 隣接する活動との連携がない
- 補助金や助成金に頼った活動が多く、持続的な資金確保が難しい



- 想定していた成果に繋がらない
- 地域の理解と協力が得られない
- 個別の取り組みとなり成果が限定的
- 補助金や助成金を得るための取り組みに傾注（質より見た目）

里海づくりにおける3つの観点

良好な海域環境の保全・再生・創出

地域の特性に合わせて「保全」・「再生」・「創出」を行う

⇒特性に合わせた方向性の決定

里海における地域資源の利活用と好循環の形成

持続可能にするために、地域資源の適切な利活用、生態系に着目した観光コンテンツ、ブルーカーボンのクレジット化、企業の参画

⇒人・物・金の確保と活動への還元の好循環

地域の歴史、伝統、文化や自主性を重んじた多様な主体の参加と連携

主体以外の地域住民、事業者、自治体などの協力

⇒地域課題解決と結びつけた連携・協力体制

まずはじめに行うこと

目標の共有：その地域で目指す里海の姿を想像して文書化・図化
 ⇒どの様な里海（場）なのか？
 ⇒誰がどの様なことをしている（状態）場なのか？
 ⇒主役となるステークホルダーは誰なのか？

現実の認識：目標と現実のギャップを明示
 ⇒現状と何がどの様に違っているのか？

課題の認識：不足しているものを客観的（科学的）に明示
 ⇒ギャップはなぜあるのか？（客観的・科学的根拠）

まずはじめに行うこと

実力の認識：課題解決のために必要な事、できることやできないことの整理

⇒今できることを客観視
 ⇒ギャップを埋めるために必要な事は？

解決の道標：解決のためのプロセス（方法と時間）の整理・明示
 ⇒客観的（科学的）に検討
 ⇒今できることの実践計画と今後取り組むべき事項の計画

誰のための、何のための
 里海づくりなのか？

里海づくりのあり方について

～人と自然が共生し、恵みを未来へつなぐ～

里海とは、人の暮らしや営みによって育まれてきた沿岸域の自然環境です。
その恵みを持続的に受け続けるために、
「人と自然のよりよい関わり」を再構築していくことが重要です。

目指す里海の姿

- ✓ 多様な生きものが育まれる豊かな自然
- ✓ 地域の人々が誇りと愛着を持てるふさと
- ✓ 自然の恵みを生かした産業や暮らし
- ✓ 未来の子どもたちへつなぐ持続可能な海

里海づくりの基本的な考え方



人と自然の共生

人の営みと自然のつながりを回復し、共に支え合う関係を築きます。



恵みの持続利用

水産資源や景観などの恵みを、将来にわたって持続的に利用します。



多様な主体の参加

地域住民、事業者、行政、教育・研究機関などが連携し、協働で取り組みます。



学びと継承

里海の価値を学び、次世代へ伝えることで、意識と行動の輪を広げます。



科学的知見の活用

モニタリングや調査研究に基づき、効果的な施策を計画・実行します。

重点的に取り組む分野



豊かな生態系の保全・再生

- ・干潟・塩場・ヨシ帯などの保全・再生
- ・生物多様性の保全と外来種対策



水産資源の持続的な利用

- ・資源管理の推進と漁業の振興
- ・環境に配慮した養殖・漁法の普及



美しい景観と環境の保全

- ・海岸清掃やごみ対策の推進
- ・水質改善と流域からの負荷削減



地域づくりと交流の促進

- ・里海を活かした観光・体験活動の推進
- ・地域文化や食の魅力の発信



教育・学習の推進

- ・学校教育や体験学習の充実
- ・里海に関する情報発信と普及啓発

里海づくりの進め方

1

現状の把握

自然環境や地域の暮らし、課題を調査・把握します。



2

目標の設定

地域の特性や課題に応じた里海の将来像と目標を共有します。



3

計画の策定

目標の実現に向けた取組を計画し、役割分担を明確にします。



4

取組の実施

地域一体となって、保全・再生・活用の取組を実践します。



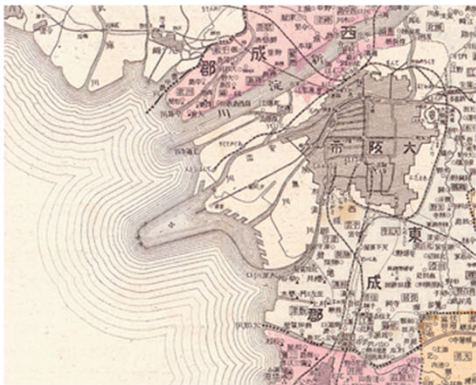
5

評価と改善

取組の成果を評価し、次のステップへつなげていきます。



難しくなった大阪湾の里海



- ほとんどが埋立地のため、人々が自由に海と直接ふれあえる浜がほぼ存在していない。
- かつては文化的に海との深いつながりがあったが・・・
- 里海は、かつては生活の一部として人間が関わり続けて維持されていたが、今は希薄。

- 狭い国土の中で、食料や燃料などの生活の根幹部分を自然から得ていた（生態系サービス）
- そのため、枯渇しないように利用をコントロール（保全の行動様式）
- これを後世に伝えていくために、八百万の神として自然界のあらゆるものを神としてあがめ奉り、祭りという文化で継承してきた。

どこで誰の（主役）ために？

目標の共有：その地域で目指す里海の姿を想像して文書化・図化
 ⇒どの様な里海（場）なのか？
 ⇒**誰が**どの様なことをしている（状態）場なのか？
 ⇒**主役**となるステークホルダーは誰なのか？

- 構想から具体的な姿（目標）へ ⇒ どこで
- 目標達成時はどの様な状態？ ⇒ 何を
- 目標達成時は誰が中心（主役）？ ⇒ 誰の

こうしたい・こうあって欲しいレベルでOK
 関係者で共通認識を持つために必要

そのためには「今」を知る

現実の認識：目標と現実のギャップを明示
 ⇒現状と何がどの様に違っているのか？

課題の認識：不足しているものを**客観的（科学的）**に明示
 ⇒ギャップはなぜあるのか？（**客観的・科学的根拠**）

- **現状**はどうなっているのか？
- **阻害要因**は？阻害要因を取り除くための**技術**は？
- 技術の**効果**を維持させていくためには？
- 維持に必要な**人・物・資金とそのスキーム**は？

何をどうする？

実力の認識：課題解決のために、できることやできないことの整理

⇒**今できること**を客観視

⇒ギャップを埋めるために必要な事は？

解決の道標：解決のためのプロセス（**方法と時間**）の整理・明示

⇒客観的（科学的）に検討

⇒今できることの**実践計画**と今後取り組むべき事項の計画

- 科学的根拠に基づき、何をどの様に進めるのかを決める
- 取り組んでいくための**現実的な時間軸**
⇒諸事情はさておき、目標達成を見据えて

都市部の里海づくりは難しい！

- ✓ 都市部の里海づくりは「**創出**」であり、再生や保全と同じような考え方は適さない
- ✓ **都市部特有の環境に適した対象物と方法が必要**
⇒**科学的根拠なし**の海草藻類移植は愚の骨頂
- ✓ また、移植しても**維持させることが何百倍も難しい**
- ✓ **海との接点が希薄な地域でどの様に周囲の理解を得るのか？**

⇒技術は進歩していて初期効果は期待できるが・・・

⇒維持を阻害する要因を排除できるのかが大きな課題

里海における地域資源の利活用と好循環の形成

持続可能にするために、地域資源の適切な利活用、生態系に着目した観光コンテンツ、ブルーカーボンのクレジット化、企業の参画

⇒地域の何をどうしたら人や企業が興味を持つのか？

⇒資源の保全と利用のバランスや循環するための仕組みは？

地域の歴史、伝統、文化や自主性を重んじた多様な主体の参加と連携

主体以外の地域住民、事業者、自治体などの協力

⇒地域課題解決のためにできること（間接的でOK）

特に複雑な土地利用や管理がある都市部では、様々なステークホルダーの協力体制が不可欠

⇒行政主導の「はじめの一步」は効果的

協力体制構築のために

- 主役となるステークホルダーを中心としたスキーム
- 集まった人たちの役割の明確化
- 持続可能性を確保するための柔軟で強靱なガバナンス（誰でもいつでもいつまでも）
- 主役にバトンを渡すタイミング（行政からの）
- 地域と課題解決と地域とをつなぐファシリテーター

特に、「人」「物」「金（資金）」「技術」を誰がどの様に役割として担うのか？

例えば 東京湾UMIプロジェクト

(東京湾・海をみんなで愛するプロジェクト)

- 東京湾再生推進会議の取り組みの一環でスタート
- 多様な主体による東京湾での生物多様性確保と、一人一人の海への理解・関心高めることが目的
- 現在は企業16社＋国土交通省＋NPOで構成
- 国土交通省が事務局の役割を持ち、各企業が東京湾でアマモ場再生活動を実施
- 参加企業主体の連絡会議で日程などの調整を実施
- 活動費は、参加各社で負担
- NPOは各社の活動を支援

プラットフォームづくりは国交省だったが、現在は各企業が主体になっている

東京湾UMIプロジェクト

様々な思惑はあるが、基本は各社自身で活動に参加している。

- ある企業は、投資家などへの企業価値向上PRのため
- ある企業は、社員の福利厚生のため
- ある企業は、自社技術の開発・向上のため
- ある企業は、脱炭素社会での社内の取り組みを加速するため
- ある企業は、脱炭素ビジネスのため
- ある企業は、純粋な社会貢献のため

協力体制を広げることも重要 ステークホルダー以外にも大切なメンバー

義務を持っている人

⇒管理者や地権者：協力を要請

権利を持っている人

⇒漁業者や利用する一般市民：メリットを出す

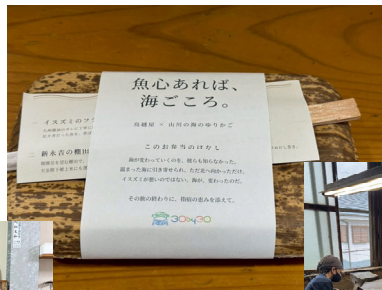
これらをつなぐ仲介者

⇒研究者やNPO：研究や活動の成果を出す

漁業者や利用する一般市民のメリット

体験型観光コンテンツの開発 ⇒水産資源消費拡大・地域活性

SAP藻場再生＋お魚教室教室＋イスズミ弁当＋水産加工場見学＋地域観光



山川の海のゆりかごを守る会
<https://yamakawamothersea.com/>

最後に

社会と経済の土台となる生物多様性は、単純ではない

⇒地域性や局所環境などの特性の影響を受けるためコピペは×

人為的な改変には一生付き合わないといけない

⇒良い環境をつくっても、一生維持のために付き合わないto×

小さいことからコツコツと

⇒大きな打ち上げ花火より小さな線香花火

⇒人・ものは資金より重要な要素。資金に頼ることのない活動を持つことが継続にとって大切（ブルーカーボンは・・・）